

目次

- ① 概要
- ② 甘露寺蜜璃とは
- ③ 蜜璃の要素：怪力
- ④ 蜜璃の要素：桜餅(桜)
- ⑤ 蜜璃の要素：大食い
- ⑥ まとめ、参考文献



① 概要

集英社出版『週刊少年ジャンプ』で連載されていた吾峠呼世晴『鬼滅の刃』に「甘露寺蜜璃」という女性が登場する。蜜璃は女性読者から支持され、『鬼滅の刃』登場人物のなかでも人気を集める。しかし蜜璃は「隊服のボタンがしまりきらず巨乳がはみだす」という男性にアピールするような容姿。かわいい系女子を主張するタイプであり、女性から敵視されるとも予想される。私は、蜜璃が女性読者に人気である理由を考察することで、現代の女性が好む女性像を明らかにしたいと考えた。結果、日本の古典作品における伝統的な美意識から人物設定されていることや、男性にアピールする容姿であっても女性が共感しやすい性格や行動を読み取れることを明らかにした。

② 甘露寺蜜璃とは

- ✳蜜璃とは『鬼滅の刃』に登場する女性キャラクター。
- 桜餅が好物で髪の色に反映されている。
- ✳鬼殺隊(鬼を殺す組織)に所属しており、階級は最高位の柱。恋の呼吸の使い手で、恋柱と呼ばれる。
- ✳性格は天真爛漫で感情豊か。
- ✳特異体質の持ち主で、筋肉の密度が一般的な人間の八倍存在する怪力の持ち主。そのため消費するカロリーも多く作中では度々人並み外れた量の食事(大食い)をしている姿が描かれている。
- ✳戦闘スタイルは一見セクシャル・エントラップメント(美人局、ハニートラップ)を仕掛けるように見えるが、作中で蜜璃が自分の身体を使って鬼を魅了するような場面は一切ない。
- ✳同じ柱の女性キャラクターである胡蝶しのぶとは作中での役割が異なっている。性格を例に挙げると、蜜璃は天真爛漫で感情豊かだが、しのぶは冷静沈着に描かれている。
- また、しのぶは死んだ姉の復讐に生きていたが、蜜璃は女の子としての幸せを望み生きていた。



桜餅



甘露寺 蜜璃

④ 蜜璃の要素:怪力

日本の古典作品で怪力の女性が登場する物語

『今昔物語集』 本朝世俗部
 「二十三巻 尾張国女伏美濃狐語第十七」
 「二十三巻 尾張国女取返細墨語第十八」
 「二十三巻 相摸人大井光遠妹強力語第二十四」

「二十三巻 尾張国女伏美濃狐語第十七」「二十三巻 尾張国女取返細墨語第十八」は、日本書紀にも同様の話が所収されている。また、話に登場する女性たちの祖先の話も「上巻 狐を妻として子を生ませし縁 第二」「上巻 電の悪を得て、生ませし子の強力在りし縁 第三」に、それぞれ記されていた。これらの話に登場する女性は、**先祖が人ならざる者と交わるにより強い力を有している。**

原拠とした話が『宇治拾遺物語』「巻十三 大井光遠の妹、強力のこと」という作品名で所収されている。この話に登場する女性は**純粋に力が強い。**

日本の説話集の中に登場する力の強い女性には、二通りの像が見える。

- ①先祖が人ならざる者と交わるにより強い力を有している。
- ②純粋に力が強い。

蜜璃は②に属する。

「二十三巻 相摸人大井光遠妹強力語第二十四」は姫君がその強力で盗人を追いつす話である。作中で姫君の容姿は、「形子有様美麗ナル女有リケリ」と称され見た目が美しいことが分かる。また、『宇治拾遺物語』の「巻十三 大井光遠の妹、強力のこと」になるとこの表現は、「みめ、ことがら、けはひもよく、姿も細やかなるありけり。」となる。この表現から、姫の容姿が筋肉質な身体ではなく弱々しいことが分かる。さらにこの物語は姫君が「男に生まれてはばなあ」と賞賛の音が書かれている。これらことから、「怪力の美女」という設定が平安時代から存在した**伝統的な要素**であり、賞賛の対象であったことが分かった。



⑤ 蜜璃の要素:桜餅(桜)

蜜璃の持つ要素の一つが桜餅、そして桜餅は良い匂いがするため、香りのある桜が連想できるといえるだろう。

この桜をシンボルとすることで蜜璃をどのように描くことができるかを考察するために、桜が日本人にどのように理解されてきたかについて和歌を用いて確認する。

『古今和歌集』「春」の部立に所収されている和歌は歌番号1~134までの134首。このうち、歌番号49~118まで70首が桜の和歌である。

この中には、桜の花が散ったとしても次の年にまた咲くことを知りながらも、桜を惜しむ和歌が複数存在する。

さらに、「桜の花が散ることは毎年繰り返される」ということは、「新しく生まれ変わる」ということ象徴ではないかと考える。

『古今和歌集』(小学館『新編日本文学全集』)歌番号70番には、「散るからこそ、愛着が増す新しく生まれ変わる」という歌が記されている。

こういった「消えてゆく美しさ」という日本人的な美意識が、『古今和歌集』(905)の時代に確立されていたことを指摘しておきたい。

蜜璃には桜の要素が込められていると考えるが、その桜には「時が来ればまた必ず新しく生まれ変わる」という要素がある。つまり蜜璃は登場した時点、あるいは設定が決まった時点で死ぬことが決まっていたキャラクターではないだろうか。

蜜璃には、日本人が潜在的に桜に抱いている印象が組み込まれている。=桜餅(桜)は**伝統的な要素**である。

⑥ 蜜璃の要素：大食い

蜜璃の大食いという設定は現代ではよく目にするが、古典作品では見ることが出来ない。『宇治拾遺物語』に「巻第二 清徳聖、奇特の事」「巻第四 狐、人に憑きてしとき食ふこと」という二話が所収されている。この二話はどちらも「人ならざるものが人間に取り付き、大食らいになる」と言う話である。つまり、よく食べること(大食い)が良いこととされていない。

『宇治拾遺物語』の時代において、「食べる」ことが推奨される時代ではなかったのではないだろうか。これは仏教思想において、食欲、財欲、色欲が推奨されない欲求として認識されていたために、よく食べるという設定は賞賛の対象として描くことが出来なかったと考える。

ただし現代社会においては「よく食べる」ことは健康な体を形作ることであり、あるべき姿として捉えられている。現代で普及しているインターネットのサイトにyoutubeという動画サイトが存在し、検索欄に「大食い」と入れて検索すると男女問わず、大食いの動画が多くヒットする。そこには大量の料理を前に笑顔で料理を食べる人たちの動画が上がっていた。つまり「よく食べる姿が良い」と言った風潮は古代中世のものだけでなく、現代の考え方であると考えられる。

「よく食べる」という要素は現代では推奨され賞賛の対象であることが分かる。つまり「大食い」は**現代的な要素**である。

⑤ まとめ

蜜璃には、①怪力②桜餅(蜜璃の髪色)③大食い、という三つの要素が描かれている。怪力の要素は古代中世のころから存在した設定であり、伝統的なものであった。次に桜餅の要素は、桜が「消えてゆく美しさ」という日本人的な美意識が『古今和歌集』の時代から存在していることから、伝統的な要素である事が分かった。また、この要素によって蜜璃が亡くなったため、彼女の一生が我々読者の記憶に印象付けられたことだろう。最後に大食いの要素は古代中世には推奨されない欲求であり、現代的な要素であることが分かった。つまり蜜璃は怪力による**伝統的な要素**も、大食いによる**現代的な要素**も合わせ持っており、さらに桜の要素により蜜璃の一生が日本人的な美意識の象徴であることから、かわいいと支持されるのではないだろうか。

<参考文献>

- 『鬼滅の刃』、1~23巻、吾峠呼世晴、(2016)、集英社
- 『今昔物語集』、新編日本文学全集、馬淵和夫、小林、檀古、(1996)、小学館
- 『宇治拾遺物語』、新編日本文学全集、小沢、松田、(1994)、小学館
- 『古今和歌集』、新編日本文学全集、小沢、松田、(1994)、小学館
- 『古今和歌集』、新編日本文学全集、小沢、松田、(1994)、小学館
- [youtube]、<https://www.youtube.com/?gl=JP>、(参照2021年3月10日)